ウィキペディア編集とメディアリテラシーの育成：司書養成科目における実践の報告

Wikipedia editing and the development of media literacy:
A report on practice in a librarian training class

HASHIZUME Akiko
橋　詰　秋　子
図書館学課程准教授

抄録：

ウィキペディアの編集が学生のメディアリテラシー育成につながることを、実践女子大学短期大学部の司書養成科目における試みから論じる。2022 年に、「図書館情報資源特論」の中で、学生がウィキペディアの人物記事を編集・執筆する演習を行った。これは、特殊なウェブメディアであるウィキペディアとの適切なつきあい方を身につけさせることを狙った試みであった。学生がもつウィキペディアのイメージは演習前後で変化し、この狙いはある程度達成したと考えられる。

Abstract：

This study examines how the experience of editing Wikipedia leads to the development of media literacy in students, based on the practice in Jissen Women's junior college librarian training class. In an "Advanced Library and Information Resources" class in 2022, we conducted an exercise in which students edited and wrote Wikipedia articles about specific people. This attempt aimed to help students learn how to effectively use Wikipedia, a unique web medium. The students' image of Wikipedia changed before and after the exercise, suggesting that this aim was achieved.

1. ウィキペディアと大学教育、メディアリテラシー

本稿では、ウィキペディア（Wikipedia）の編集が学生のメディアリテラシー育成につながることを、短期大学の司書養成科目における試みを中心に論じる。

よく知られているように、ウィキペディアは世界最大のインターネット百科事典である。非営利団体であるウィキメディア財団が運営し、いつでもだれでも無料で閲覧できるとともに、出典

明示をすればコンテンツを誰でも自由に使用できる。共同作業で創り上げる百科事典でもあり、だれでもコンテンツの執筆や編集に参加できる。サーチエンジンの検索では上位にヒットしやすいが、その執筆者が何らかの資格により制限される訳ではないため、コンテンツの信頼性に疑念を持たれることが多い。例えば、学生 148 名を対象とした長塚らの調査[1] によると、ウィキペディアの記事を「信頼している」と答えた学生は 21 名（全回答者のうち 21.6%）で、過半数を超える 103 名（69.6%）は「どちらともいえない」と回答している。

こうしたコンテンツへの信頼性の低さにも関わらず、ウィキペディアは非常によく利用されている。ウィキペディアの 2023 年 10 月の月間アクセス数（日本語版だけでなく、英語版等の全言語版を含める）は約 80 億で、1 位の Google、2 位の Youtube、3 位の Facebook、4 位の Twitter に次いで世界第 5 位である[2]。こうした人気の理由は、ウィキペディアの守備範囲の広さや規模の大きさにあると考えられる。ウィキペディアには時事的なトピックがすぐに掲載され、芸能人やマンガ、アニメといった通常の百科事典では掲載されにくいトピックも調べることができる。ウィキペディアは 336 言語で展開され、うち日本語版だけでも約 139 万項目を有している[3]。一般的な百科事典の代表格である『世界大百科事典』（平凡社）の項目数が約 9 万であることを考えると、ウィキペディアの桁違いの規模の大きさが分かる。渡辺が指摘するように、ウィキペディアは、ウェブの情報源としてみると人気や守備範囲、規模の点で無視できない存在になっているといえる[4]。

大学教育におけるウィキペディアは、レポートや卒業論文で引用しないように指導する教員もいるが、単に使用を禁止して済ませることが難しい存在になっている。使用を禁止するのではなく、適切に利用できるようにリテラシーを育成する必要がある。佐藤らの調査[5] によると、大学生はウィキペディアをぼんやりと信じてよいものと考えて使っているものの、レポートの参考文献にできるほど信ぴょう性が高いとは考えておらず、また、自分がウィキペディアの中から正しい情報を選ぶ能力があるとも考えていない。渡辺は、ウィキペディアの信頼性に関わる各種の調査結果を整理し、“「誰でも書き込める百科事典」とういう性質から想像されるほどにはひどい内容ではない” と述べている。ウィキペディアのコンテンツには質的に低いものがあるのは事実であるが、有用なものも含まれている。学生に、ウィキペディアと適切につきあう方法を身につけさせる必要がある。

本稿では、ウィキペディアを特殊なウェブメディアとして捉える。ウェブメディアとはインターネット上で情報発信するメディアを指す。その一種であるウィキペディアと適切につきあうには、マスメディアやソーシャルネットワーキングサービス（SNS）などと同じようにメディアリテラシーが必要であると考える。メディアリテラシーとは、“メディアの特性を理解した上で、メディアが発信する情報を読み解き、それを活用する能力”[6] と説明される。一般に、“テレビや新聞などのマスメディアと、インターネットを介した双方コミュニケーションツールであるソーシャルメディア”[6] が対象とされる。ウィキペディアはこのメディアリテラシーの定義から若干外れるが、「だれでもコンテンツの執筆や編集に参加できる」という点で特殊なメディアであり、やはり適切に使うためにはやはりリテラシーが求められると考える。ウィキペディアのよ

うな集合知によるウェブメディアは他にも存在しており（Amazon のレビューサイトなど）、ウィキペディアを通してこの種のウェブメディアに対するリテラシーを身につけることは有用である。

以下では、ウィキペディアをウェブメディアの一種として捉え、短期大学の司書養成科目にウィキペディアの執筆・編集を導入することで、そのメディアリテラシーを育成することを狙った試みを報告する。具体的には、ウィキペディアの記事を執筆・編集する演習を通じて、学生にウィキペディアへの深い理解やウェブメディアの情報発信者としての視点を得させる実践である。

2. 大学教育へのウィキペディア編集の導入：先行事例

教育の中にウィキペディアの執筆・編集を導入するとは、どのようなことなのか。「Wikipedia は教育の敵か？味方か？」と題する論稿の中で、ウィキペディア日本語版元管理者である海瀬氏（アカウント名）は、ウィキペディアと教育について次のように指摘している[7]。

> 教育との親和性が高いところもあります。前述の Wikipedia Town のように、地元について書かれている記事がおそらく Wikipedia には多くあると思います。書かれている内容が正しいのか、もっと書くことはないのか、書き足すとしたらどのような資料が必要なのか、その資料はどこにあるのか、資料の丸写しはダメだから文章をどうやって作るのか、等の課題を創り出すことができます。

この指摘は主に小中高校の教育を想定したものだが、大学教育にも当てはまると考えられる。そして、実際、大学教育にウィキペディアを取り入れる試みはこれまでにも数多くなされている。

例えば、尾澤らは教職の授業にこうした活動を導入している[8]。2011 年にオンデマンド授業として行われた授業の中に、ウィキペディアの編集・投稿を目指すプロジェクト学習が組み込まれた。この実践では、作成した記事を実際にウィキペディアを投稿するかどうかは学生の任意とし、実際に投稿した学生は 32 名中 16 名であった。他にも、大学の初年次教育にウィキペディアを組み込んだ実践が存在している。河本は、大学 1 年生が後期に履修する基礎ゼミにおいて、大学の近隣地域の調査とその結果を用いたウィキペディア記事の作成を行った[9]。ここでは、学生が作成した記事を実際にウィキペディアに投稿している。

「ウィキペディアタウン（Wikipedia Town）」と呼ばれる活動を取り入れた授業実践も目立つ。ウィキペディアタウンとは、対象となる地域の街歩きなどを行った上で、その地域にある史跡や観光名所などについてのウィキペディアの記事を書くという参加型イベントである。もともとは 2014 年にイギリスで始められたものだが、徐々に日本でも開催されるようになった。特に、公共図書館が市民向けイベントとして開催することが多い。公共図書館は、地域資料や郷土資料、図書館員によるレファレンスなどウィキペディアの記事作成に役立つリソースを持っており、ウィキペディアタウンと相性がよい[10]。大学教育においても、ウィキペディアタウンを組み込ん

だものがある。図書館との親和性の高さゆえか、司書養成科目における実践が存在する。例えば、桂は、司書養成科目の一つである「図書館総合演習」にウィキペディアタウンを取り入れている[11)]。2016 年の授業実践では、対象となる地域についての情報収集や外部講師による 2 回の事前レクチャーを行った後に、1 日をかけてウィキペディアタウンを開催している。学外からの参加も呼び掛け、編集に必要な文献のサポートを地元の公共図書館に依頼するなど、学外機関との連携も試みられている。日向は、学芸員養成科目「博物館情報メディア論」にウィキペディアタウンを導入した[12)]。2015 年に行われたこの実践では、地元の図書館を会場としたウィキペディアタウンに学生が参加している。この他、学生がゼミ活動としてウィキペディアタウンを自ら企画し運営する実践も報告されている[13)]。

北米に目を向けると、ウィキペディアと大学教育はより近しい関係にあるようだ。アメリカ図書館協会から出版された *Leveraging Wikipedia*[14)] によると、「ウィキペディア教育プログラム」と名付けられた活動が 2010 年から開始され、ウィキペディアと大学教育が連携する公式な仕組みとして機能している。米国とカナダではプログラムに参加する大学が増え、2017 年には 335 の科目がプログラムを利用している。内容としては、学生が専門コースの内容に関係するトピックの記事を書きウィキペディアに投稿するというものが多い。例えば、米国のカンザス州立大学では、歴史の科目の中で、博物館や図書館で資料を調査し、その結果をウィキペディアの記事の出典に追記する活動が行われている。

3. ウィキペディア編集の演習

実践女子大学短期大学部図書館学課程の科目「図書館情報資源特論」では、2021 年からウィキペディア編集を授業に組み込んでいる。以下では、2022 年度に実施したウィキペディア編集の様子を報告する。

3.1　演習の概要と狙い

この科目は、図書館学課程の選択必修科目であり、主に短期大学部の 2 年生が履修する。図書館で扱う情報資源に関する課題を扱う発展的な科目であり、本学ではウィキペディアとデジタルアーカイブを取り上げて、これらのデジタル情報資源の詳細と図書館活動への影響と可能性について考察する内容としている。

この科目にウィキペディア編集を取り入れた狙いは 3 つある。狙いの一つは、やはりメディアリテラシーの育成である。現在の情報化社会において、図書館の司書には世の中に存在する情報を見極める力が求められている。司書が見極めるべき情報は、紙の書籍のみならずウェブの情報も対象となる。学生は、紙の書籍以上にウェブの情報を見極める経験が少ない。また 2 つ目の狙いに、学生が情報生産者としての視点を得ることがある。学生は日々多くの情報に接しているが、情報を作成したり発信したりする人はまれで、多くは情報の消費者としての視点しか持っていない。情報生産者としての視点は、自分がウェブ情報の質の向上に貢献できることを認識させ

るとともに、メディアリテラシーを身につける土台になる。3つ目の狙いには、図書館とウィキペディアの親和性の高さを理解させることがある。図書館とウィキペディアは一見すると相反する存在のように思えるが、ウィキペディアの編集方針の一つである「検証可能性」を重視して記事を編集するには、記事の根拠となる出典資料が必要となり、図書館はその資料を提供することができる。学生には、図書館資料を使ったウィキペディア編集を経験することで、両者の結びつきによって実現できることの多さを実感してほしいと考えた。

以上のような狙いから、2021年度から図書館学課程の科目にウィキペディア編集を取り入れた。特にメディアリテラシーの育成という狙いから、ウィキペディアの三大編集方針のうち「検証可能性」を重視した内容とした。演習のやり方を検討した際は、ウィキペディア内の「教育プログラムでウィキペディアを執筆する」ページ[15]を参考に、教員がウィキペディア内の利用者ページの中に演習の時期や内容を説明するサブページを作成しウィキメールを設定した。またウィキペディアンに相談にのってもらい、事前に進め方や注意点について有用なアドバイスを得た。

本稿で報告する2022年度の授業は、ウィキペディア編集を取り入れた2年目であった。なお、2022年度の当該科目の受講生は9名で、全て日本語コミュニケーション学科の所属であった。

3.2　授業の展開

ウィキペディア編集の演習は、全14回の授業のうち前半の7回分を使って実施した[16]。各授業回における内容は、表1のとおりである。

表1　各授業回における演習内容

授業回	内容
1	科目ガイダンス
2	教員によるウィキペディアの講義
3	ウィキペディアンによる特別授業（出典付けワークショップ）
4	記事にする人物の選択 手本となる人物記事の分析 執筆に必要な情報の調査・収集
5	執筆に必要な情報の調査・収集 記事原稿の執筆
6	記事原稿の執筆 Wiki記法による下書きの作成
7	Wiki記法による下書きの作成 本番環境への公開 成果の発表・演習の振り返り
⋮	
14	公開後の状況の確認（科目全体の振り返りの中で）

全体を通してみると、演習は以下の（1）から（10）のステップで進めた。(3）から（8）の編集作業は、グループワークで行った。

(1）教員によるウィキペディアの講義
(2）ウィキペディアンによる特別授業（出典付けワークショップ）
(3）記事にする人物の選択
(4）手本となる人物記事の分析
(5）執筆に必要な情報の調査・収集
(6）記事原稿の執筆
(7）Wiki 記法による下書きの作成
(8）本番環境への公開
(9）成果の発表・演習の振り返り
(10）公開後の状況の確認

以下、この順に詳細を説明する。

(1）教員によるウィキペディアの講義

まず初めに、ウィキペディア編集の前提となる知識を教員が講義した。ウィキペディアは集合知による百科事典であること、ウィキペディアには編集方針（中立的な観点、検証可能性、独自研究は載せない）があること、編集に当たっては著作権やプライバシーなどの社会ルールを守ること、記事は Wiki の記法によって書かれていることなどを解説した。学生には、宿題として、ウィキペディアに自分のアカウントを作成することを求めた[17)]。

(2）ウィキペディアンによる特別授業（出典付けワークショップ）

続いて、ウィキペディアンの海獺氏をゲスト講師に招き、特別授業を実施した。この授業では、ウィキペディアの特性や編集管理に関する説明を受けた後で、出典付けのワークショップを行った。出典付けワークショップは、予め用意した図書を使って既存のウィキペディアの記事に出典となる情報を追加するものである。この授業を通じて、学生はウィキペディアが現実の人間によって作られて管理されていること、ウィキペディアの記事に出典を付けることによって検証可能性が担保され記事の質が向上することを実感していた。

(3）記事にする人物の選択

ここから学生は、2、3 人のグループに分かれてウィキペディアの人物記事を作成した。女子大学ということもあり、記事のテーマにする人物は、日本語版ウィキペディアにまだ記事のないと女性とした。教員が候補となる人物を予めリストアップし、学生はその中から自分たちが記事を作る人物を選択した。なお、東京パラリンピック（2020 年）が記憶に新しかったことから、2022 年度の演習では女性パラアスリートをテーマとした。

(4）手本となる人物記事の分析

学生と教員とで、手本となるウィキペディアの人物記事を読み込み、どんな情報が載っているか、どのような情報源が出典として付けられているかを分析した。これは、学生に出来上がりのイメージを持たせるためのステップである。分析した結果判明した「人物記事に掲載する内容(記事のテンプレート)」と「出典に使える情報源（事典、新聞データベース、パラリンピック関連の図書など)」はリスト化し、学生が後から参照できるようにした。

(5) 執筆に必要な情報の調査・収集

(4) の結果を踏まえて、学生が記事の執筆に必要な情報を調査した。共同作業を効率的に進めるために、Google ドライブに受講生で共有するフォルダを設定し、各人が見つけた情報はフォルダ内の Google ドキュメントに追加して共有することとした。

(6) 記事原稿の執筆

(5) で集めた情報を使って、Google ドキュメントで記事原稿を作成した。(3) の記事テンプレートに沿った原稿とし、「検証可能性」を担保するために必ず出典をつけることを求めた。また、受講生全体で「Wikipedia: 存命人物の伝記」ページを読み、存命人物記事の作成に当たって注意すべき事柄を確認した。最終的な原稿については、ウィキペディアに掲載しても問題ない内容かを教員が確認した。

(7) Wiki 記法による下書きの作成

(6) の原稿に Wiki 記法を追加し、ウィキペディアに公開する下書きを作成した。下書きでは、ウィキペディアの「サンドボックス」ページを使用した。グループ作業のため、各人で担当を決めた上でそれぞれの担当部分について下書きを作り、最終的に Google ドキュメント上でそれを統合する形をとった。

(8) 本番環境への公開

(7) で統合した下書きの内容が問題がないことを教員が確認した後で、各学生が担当部分について本番環境へのアップロードを行った。公開後すぐにスマートフォンで自分の作った記事を見るなど、多くの学生は一つの記事を作り上げた達成感を得ていた。

(9) 成果の発表

グループごとに作成した人物記事の内容や苦労した点などを発表し、受講生内で共有した。

(10) 公開後の状況の確認・演習の振り返り

公開から 2 か月ほど経ってから、ウィキペディアの「編集表示」機能を使って、自分たちが公開した記事についてその後の編集状況を確認した。多くの記事では、公開後の早い段階で他の人による草取りや追加の編集が行われていた。他の人による編集箇所を見ると、自分たちの記事に足りなかった部分や不十分だった部分を知ることができる。授業の最後では、演習全体の振り返りを行った。

3.3　編集に関わる課題とその解決策

学生が作成したウィキペディアの記事の一例を、図 1 に示す。これまでに作成した記事で公開後に大きな修正が入ったものはなく、及第点に達した記事が作成できているのだろうと捉えている。

図 1　学生が作成したウィキペディア記事

出典）ウィキペディア日本語版

演習の中で、ウィキペディア編集に関していくつかの課題が生じた。ここでは主な課題を 3 つ取り上げる。

1 点目は、「(5) 執筆に必要な情報の調査・収集」ステップにおいて、適切な情報が見つけられない学生が散見されたことである。図書館学課程の科目の中には情報の調査手法を学ぶものがあるが、短期大学部のカリキュラムの都合上この演習と同時並行で受講しており、調査手法のスキルが身についていることを前提にできない。この演習の中で調査手法を教える時間的余裕はないため、教員が予め情報源の目星をつけておくなど適宜のフォローが必要である。

2 点目は、当初は、教員によるウィキペディア編集の指導が上手くいかなかったことである。担当教員は、図書館イベントの参加を通じてウィキペディアの出典付けや加筆を行った経験はあったが、一から記事を作成した経験があまりなかった。そのため、演習の初年度は指導のポイントが分からず苦労した。この反省を受けて、ウィキペディアのイベントに積極的に参加し、自ら記事を執筆する経験を積んだ。これらの経験により、指導のポイントが分かるようになり、2 年目からはある程度適切な指導ができるようになったと考える。

3 点目は、記事のテーマの特筆性である。ウィキペディアには、記事のテーマが百科事典に収めるのに適切かどうかを判断する基準がある。ウィキペディアの記事は注目に値する「特筆性」がなければならず、何でも記事にしてよいという訳ではない[18)]。2022 年度の演習では女性パラアスリートを記事のテーマとしたが、この種の存命人物に特筆性があるかどうかは意見の分かれるところである。なお、この課題を受けて、2023 年度からは、人物事典に載るような女性の偉人をテーマとすることに変更した。

4. 考察：演習後のイメージの変化

受講生には、当該科目の最終回に、演習全体の振り返りとして「演習前後のウィキペディアのイメージの変化」を書いてもらった。このイメージの変化に関するコメントから、学生がメディ

アリテラシーの修得につながる視点を獲得したことが読み取れる。

以下に、学生のコメントの中から特徴的な意見を示す[19]。

- 課題に取り組む前はなんとなく信頼できないサイトだというイメージだったが、ウィキペディアに書いてあることは根拠のある情報であるというイメージに変わった。もちろん全ての記事に出典がついている訳ではないが、だからこそ、自分でウィキペディアの記事を見るときはどういう情報源から情報を持ってきているのかというところに着目する必要があると感じた。
- 演習で信頼できる情報源を探して出典をつけていくことを体験し、ウィキペディアのイメージが変わった。記事を作るために、インターネットサイトのみならず、新聞などのより信用性の高いメディアを使うことを心掛けたり、情報の根拠を示すことを意識したからこそ、ウィキペディアの情報がすべて信頼できないわけではなく、しっかりと信頼できる情報もあることに気づいた。
- 今まで漠然と、ただ情報が得られるサイトとして見ていたが、情報の編集や新規記事の作成を通して、あくまでこれは百科事典なのだという認識が深まった。
- 記事に書かれている情報には出典が存在するため、知りたいテーマの参考文献がまとまった書誌として使えると感じた。
- ウィキペディアは不正確な情報が記載されているというイメージから、できる限り正しい情報を記載しようと日々努力し創られているというイメージに変わった。
- 一時的な荒らしや信憑性のない記事もあることはありますが、しっかりと確認したり、他の人が加筆したりと百科事典としてどんどん発展していると感じました。
- 自分が公開した記事がいつの間にか見知らぬウィキペディアンにより推敲されており、記事を見回っている人たちの働きを実感した。自分が公開した記事が多くの人から閲覧されていることが分かり、嬉しかった。

いずれの受講生も、演習を通じてウィキペディアのイメージが変化したとコメントしている。

“根拠のある情報”、“信頼できる情報源を探して出典をつけていく”、“記事に書かれている情報には出典が存在する”といった出典に関するコメントが多く、「検証可能性」に対する意識が高まったことが分かる。メディアが発信する情報を検証することはメディアリテラシーの土台である。ウィキペディアの編集を通じて、メディアリテラシーにつながる「検証」とういう意識を獲得したと捉えられる。

他方、“自分が公開した記事がいつの間にか見知らぬウィキペディアンにより推敲され”、“日々努力し創られている”などのコメントからは、集合知としてのウィキペディアの可能性を理解したことが読み取れる。“一時的な荒らしや信憑性のない記事もあることはありますが、しっかりと確認したり、他の人が加筆したりと百科事典としてどんどん発展している”というコメントは、「共同で創り上げるもの」というウィキペディアの特性故の問題点をきちんと指摘しており、ウィキペディアというウェブメディアを深く理解したと捉えられる。また、ウィキペディア

が“知りたいテーマの参考文献がまとまった書誌として使える”と述べたコメントは、ウィキペディアの適切な使い方に改めて気づいたことを示唆している。

5. おわりに

本稿では、短期大学の図書館学課程の科目「図書館情報資源特論」に、ウィキペディア編集を取り入れた試みを報告した。この試みは、ウィキペディアの記事を執筆・編集する演習を通じて、学生に、特殊なウェブメディアであるウィキペディアとの適切なつきあい方を身につけさせることを狙ったものであった。

こうした狙いは、受講生の振り返りコメントから、ある程度達成できたと考えられる。受講生がもつウィキペディアのイメージは演習前後で変化した。演習前の受講生は、ウィキペディアを“なんとなく信頼できないサイト”として単純に捉えていたが、演習後は、ウィキペディアの記事の中には出典がつけられた情報から成る信頼に値するものも存在すること、ウィキペディアの記事の信頼性はその記事の出典を見れば判断できること、などの気づきを得ていた。こうした気づきはメディアリテラシーの土台となるものであり、今後、受講生自身が各記事の信頼性を見極めながらウィキペディアを利用していくことで、より強固なメディアリテラシーの修得につながるだろう。また、実際にウィキペディアに記事を投稿しウェブメディアの情報発信者としての視点を得たことも重要である。情報発信者の視点が、集合知によるウェブメディアに対するリテラシーの土台と考えられるからである。自分が発信した情報が多くの人から参照される喜びや誤った情報を掲載できないという責任感を感じる経験が、この種のウェブメディアへの理解をより深くする。

大学教育にウィキペディア編集を導入する試みは、司書養成科目だけでなく他の科目でも有用と考えられる。今後は、卒業研究などで行われているリサーチワークと組み合わせるなど、別の科目に導入できないか検討し実践していきたい。

〔注・参考文献〕

1）長塚隆，神野こずえ「学生における Wikipedia 日本語版の利用動向」『情報知識学会』21(2)，2011，p. 149–156.
2）「Most Visited Websites In The World（October 2023）」https://explodingtopics.com/blog/most-visited-websites（閲覧 2023-10-15）
3）「Wikipedia：日本語版の統計」https://ja.wikipedia.org/wiki/Wikipedia：%E6%97%A5%E6%9C%AC%E8%AA%9E%E7%89%88%E3%81%AE%E7%B5%B1%E8%A8%88（閲覧 2023-10-15）
4）渡辺智暁「われわれはウィキペディアとどうつきあうべきか」『情報の科学と技術』61(2)，2011，p. 64–69,
5）佐藤翔ら「日本の大学生の Wikipedia に対する信憑性認知，学習における利用実態とそれらに与える影響」『情報知識学会』26(2)，2016，p. 195–252,
6）庭井史絵「メディアリテラシー」『図書館情報学事典』丸善出版，2023，p. 298.
7）今井福司，海瀬「Wikipedia は教育の敵か？味方か？」『情報教育と学校図書館が結びつくために』悠光堂，2022，p. 139.
8）澤重知，森裕生，江木啓訓「Wikipedia の編集を取り入れた授業における学習者の投稿行動の特徴と学習効果の検討」『日本教育工学会論文誌』36（Suppl），2012，p. 41–44.
9）河本大地「大学初年次における「身近な地域」の調査とウィキペディア編集：奈良のならまちでの実践からみた有効性と課題」『E-journal GEO』13(2)，2018，p. 534–548.

10）日下久八「ウィキペディアタウンを介した図書館のウェブ化」『現代の図書館』 56(1)，2018，p. 16-23.
11）桂まに子「ウィキペディアタウン東山：京都女子大学図書館司書課程におけるアクティブ・ラーニング実践」『京都女子大学図書館情報学研究紀要』2018，(5)，p. 1-12.
12）日向良和「図書館における地域資料の活用事例：Wikipedia Town in Tsuru 実施とスマートフォンアプリの作成」『都留文科大学研究紀要』2016，84，p. 87-100.
13）谷島貫太「大学にウィキペディアタウンをインストールする：二松学舎大学谷島ゼミの事例」『大学の図書館』2019，38(7)，p. 108-111.
14）Proffitt，Merrilee. *Leveraging Wikipedia*： *Connecting communities of knowledge*. American Library Association，2018，263p.
15）「Wikipedia：教育プログラムでウィキペディアを執筆する」https://ja.wikipedia.org/wiki/Wikipedia:%E6%95%99%E8%82%B2%E3%83%97%E3%83%AD%E3%82%B0%E3%83%A9%E3%83%A0%E3%81%A7%E3%82%A6%E3%82%A3%E3%82%AD%E3%83%9A%E3%83%87%E3%82%A3%E3%82%A2%E3%82%92%E5%9F%B7%E7%AD%86%E3%81%99%E3%82%8B（閲覧 2023-10-16）
16）全 14 回のうち後半の 6 回分は、デジタルアーカイブに関わる演習を実施した。
17）同一 IP アドレスからの同時アカウント作成による不具合を避けるために、学生のアカウント作成は宿題とした。授業では、本名とつながらないアカウント名にするなどの注意事項を伝えた。
18）「Wikipedia: 独立記事作成の目安」https://ja.wikipedia.org/wiki/Wikipedia:%E7%8B%AC%E7%AB%8B%E8%A8%98%E4%BA%8B%E4%BD%9C%E6%88%90%E3%81%AE%E7%9B%AE%E5%AE%89（閲覧 2023-10-16）
19）振り返りコメントを匿名化した上で紀要論文に掲載することについては、受講生に伝え了解を得ている。